

漢法苞徳塾資料	No. 078
区分	基礎理論：経絡（入門講座）
タイトル	経絡について
著者	八木素萌
作成日	

☆漢法医学の最も枢要な、最も特徴的なものは、経絡の体制に関する認識であり、観念である。

◆『靈枢』營気第 16

「～營気之道・内穀為宝・穀入于胃・乃傳之肺・流溢于中・布散于外・精専者・行于経隧・常營無已・終而復始・是謂天地之紀～」

◆『靈枢』營衛生会第 18

「人受気于穀・穀入于胃・以伝与肺・五臓六腑・皆以受気～」

◆『靈枢』本蔵第 47

「人之血気精神者・所以奉生而周于性命者也・経脈者・所以行血気而營陰陽・濡筋骨・利關節者也・衛気者・所以温分肉・充皮膚肥腠理・司開闔者也・志意者・所以御精神・収魂魄・適寒温・和喜怒者也・是故血和則経脈流行・營覆陰陽・筋骨勁強・關節清利矣・衛气和則分肉解利・皮膚調柔・腠理緻密矣・志意和則精神専直・魂魄不散・悔怒不起・五臓不受邪矣・寒温和則六腑化穀・風痺不作・経脈通利・肢節得安矣・此人之常平也・五臓者・所以蔵精神血気魂魄者也・六腑者・所以化水穀而行津液者也」

その他『素問』『靈枢』の中には経絡の生理的体制としての基本的な性質についての論述が多い。印度やチベットの土着の古典医学には似通ったものが見られるそうであるが、中国医学の経絡論ほどに完成した高度に有機的なものではない由である。

☆経絡と経穴は診断と治療と養生（練気）の拠所である。

◆『難経』8 難

「諸十二経脈者・皆係于生氣之原・所謂生氣之原者・謂十二経之根本也・謂腎間之動気也・此五臓六腑之本・十二経脈之根・呼吸之門・三焦之原・一名守邪之神～」

◆『難経』3 6 難

「～命門者・諸精神之所舎・原気之所懸也～」

◆『難経』6 6 難

「～臍下腎間動気者・人之生命也・十二経之根本也・故名曰原・三焦者・原気之別使也・主通行三気・経歴於五臓六腑・原者・三焦之尊号也・～」

## ◆『靈樞』九鍼十二原第 1

「所言節者・神氣之所遊行出入也・非皮肉筋骨也～」

「今夫五臟之有疾也・譬猶刺也・猶汚也・猶結也・猶閉也・刺雖久・猶可拔也・汚雖久・猶可雪也・結雖久・猶可解也・閉雖久・猶可決也・或言久疾之不可取者・非其說也・夫善用鍼者・取其疾也・猶拔刺也・猶雪汚也・猶解結也・猶決閉也・疾雖久・猶可畢也・言不可治者・未得其術也～」

「五臟有六腑・六腑有十二原・十二原出於四閔・四閔主治五臟・五臟有疾・當取之十二原・十二原者五臟之所以稟三百六十五節氣味也・五臟有疾也・應出十二原・十二原各有所出・明知其原・睹其應・而知五臟之害矣……凡此十二原者・主治五臟六腑之有疾也・脹取三陽・癢泄取三陰～」

## ◆『素問』五藏生成第 10

「人大谷十二分・小谿三百五十四名・少十二俞・此皆衛氣之所留止・邪氣之所客也」

(注に大經所會為大谷十二分・十二經之部分也・小絡所會為小谿穴・有三百六十五名・四字誤也～とあり)、

## ◆『難經』37 難

「邪在六腑・則陽脈不和・陽脈不和・則氣留之・氣留之・則陽脈盛矣。

邪在五臟・則陰脈不和・陰脈不和・則血留之・血留之・則陰脈盛矣～」

## ◆『難經』70 難

「～春夏者・陽氣在上・人氣亦在上・～秋冬者・陽氣在下・人氣亦在下～」

## ◆『難經』74 難

「～春刺井者・邪在肝・夏刺榮者・邪在心・季夏刺俞者・邪在脾・秋刺經者・邪在肺・冬刺合者・邪在腎～」

→以上から枢要な所を整理して見よう

『素問』『靈樞』『難經』などの他の記述も考慮しつつ整理すると…

イ)『靈樞』營衛生會第 18 の記述に、「人は氣を飲食物から受け取るもので、それは胃に入ったものが〈エキスとなって〉肺を経て五臟六腑に氣として渡される。それは二種類あって、澄んでいるものは『營』と言い、濁っているものは『衛』と呼んでいる。」とある。

また『靈樞』五味第 56 には、「五穀はそれの持っている味に従って親和性のある臟腑があり、胃に入った五穀は味の持つ臟腑走向性によって五臟に行き、それを灌溉する。その際には、胃が精（エキス）としたものは『胃の両焦』へ行き、そこから岐れて榮と衛になって経絡に入る。そして、経路を流れ順行して全身隈々まで到らないと言う所は無く、然も一瞬も休むことはない。

『穀氣津液スデニ行グリ榮衛大イニ通ズ乃ハチ糟粕ハ以ッテ次イデ伝ヘ下ル』 これ

は飲食物のエキスとなったものが五臓に行き渡れば、「栄衛」は大いに通じる事になる、それで「糟粕」も伝送される」とか、「～穀を半日摂取しないでいると『気』は衰え、一日になると『気』は少なくなる」とも述べている。

つまり「穀」のエキスは五臓六腑を灌漑し、また、肺の取り入れた「気」と一体となって経脈に行く、その際には「胃の両焦」を経なければならぬ、この両焦については他の篇では上焦と下焦としており、難経では三焦の役割を強調している。此のことは「先天の元気」から別れ出て元気を現実的な「気」として機能させる格別な役割を担っている「三焦」に、「穀気」が入ってから「栄」と「衛」に岐れて、生理的に極めて重要な意味のある「もの」として機能する。

その機能している姿は、

- a : 「血気」をめぐらせて全身を隅々まで養い営ませている、
- b : 体組織を養い形ち造り筋肉や骨を潤し関節はスムーズに働けるようにしている。

このような生理的作用はまさに「経絡」に依って貫かれている。

ロ) 経脈の機能と「気」＝（「原気」と「栄」と「衛」で構成される）の機能とは切り放す事の不可能なものである。経脈は「生氣之原」（原＝源）に根ざしている、その「生氣之原」はまた「五臓六腑之本」でも「三焦之原」でもある。経脈での「気」の順行は「三焦」の役割と不可分である、「三焦」は「守邪之神」（邪から体を衛護する霊妙な機能）と言われるのであるから、それを発現している経脈は治病のための極めて重要な機能系である。

ハ) 経脈と五臓六腑の関係は、経脈が「生氣之原」から「臟腑」を経て各部へ順行する事つまり、或るものは「上焦」や「中焦」や「下焦」から出て「臟」を経て「腑」を絡ったり、或は「腑」を経て「臟」を絡ったり、或るものは指端から求心性に躯幹部に走行した後体腔内に向かって入り「臟」を循り「腑」を絡ったり、また「腑」を循り「臟」に絡う等々の様に、経脈の走行経路の上からも経絡と臟腑の関係は強いものである。それは経脈の三陰三陽の名目と五行性として標記され説明されている。つまり、経脈は

- a : 順行経路を通じて、
- b : 三陰三陽性および五行性が、臟腑のもつ三陰三陽性や五行性との同名性、つまり共通性は、相互に共振しあうので、
- c : 経脈は皆それぞれの経穴をも介して「真気」を「遊行出入」させて、人身を「天地」「自然」と交流せしめている。それは「衛気」の「留止」する「所」であり「邪気」の「客」いる「所」である。つまり五臓六腑の状況を反映するものである。その事は病の反応も穴に表現されるものである、と言う認識を示すものである。
- d : それらの経穴の中でも「原穴」には格別の意味を認めている。「365 穴の気味を

承けている」＝つまり全身の他の諸穴の作用や効能やが原穴に集約されている、また原穴には難経に言う様に「原氣」が来ている。と認識している。

二) 経脈における穴の問題には、更に五行穴と郄穴と絡穴などの所謂「要穴」や、背部の穴と腹部の募穴、複数の経脈が交叉している穴や複数経の「氣」が発現されている穴—所謂「交会穴」その他の問題がある。この様な問題部門を「穴性」問題と言う。経脈の五行性と穴の五行性と臓腑の五行性と、これらの相互関係の論を理解する必要があるが、それは五行論の理解と関連している。『難経』70難・『難経』74難の記述や「病因論」・「病機論」・「臟象論」・「病証論」などの関連する部門などの論述と考え合せると、

- a：体質性の反応を示すもの（病因論的には素因性のものとなる）、
- b：内傷性の反応のもの、
- c：外感性の反応を示すもの、
- d：その他

などの穴反応として現象するものであると言う事が出来よう。只この様な区分は穴反応のみで判断出来るものではなく総合的な診察の結果導き出されるものである。

## ☆経絡体制の俯瞰

### 1. ……皮部—孫絡—絡—大絡—經—經別

└經筋

注) 絡：穴を365絡と記述されている事がある  
 : 筋絡を単に絡と記述されている事がある  
 : 血絡を単に絡と記述されている事がある  
 : 絡脈は表裏の經を接続しているものが主であるが『素問』刺腰痛第41に見られる様に固有名のあるものがある経筋の「結」の部を絡と捉えているものが見られる。

經別は表裏関係にある經の意味ではない『靈枢』經別第11に「夫十二經脈者・人之所以生・病之所以成・人之所以治・病之所以起・学之所始・工之所止也・羸之所易・上之所難也～」と記述して後、各經別の流注を記述している。内蔵生理との関係が深いものと把握されて来た。「合」とも言う。經別は全て心を通っている。

2.

太陽	手小腸 (火)	—	足膀胱 (水)	開
陽明	手大腸 (金)	—	足胃 (土)	闔
少陽	手三焦 (相火)	—	足胆 (木)	枢
太陰	手肺 (金)	—	足脾 (土)	開
少陰	手心 (火)	—	足腎 (水)	枢
厥陰	手心包 (相火)	—	足肝 (木)	闔

注～開闔枢について → 経の種々の関係の所で説明するのでそれを参照のこと

3. 「—手太陰肺—手陽明大腸」  
 任 「足太陰脾—足陽明胃—」  
 | 「手少陰心—手太陽小腸」  
 督 「足少陰腎—足太陽膀胱」  
 | 「手厥陰心包—手少陽三焦」  
 「—足厥陰肝—足少陽胆—」

4. 12支の臓腑配当（「二十四時」は旺気の時刻）

十二時辰	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑
二十四時	3～5	5～7	7～9	9～11	11～13	13～15	15～17	17～19	19～21	21～23	23～1	1～3
十二経	肺	大腸	胃	脾	心	小腸	膀胱	腎	心包	三焦	胆	肝

1日の四季（土用）～丑・辰・未・戌

5. 10干の臓腑配当

五行	木		火		土		金		水	
陰陽	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰
天干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
蔵府	胆	肝	小腸 (三焦)	心 (心包)	胃	脾	大腸	肺	膀胱 三焦	腎 心包
季節	春		夏		長夏		秋		冬	

◆相火 壬～三焦・癸～心包……旧説

丙～三焦・丁～心包……新説（張景岳による改変）

## 6. 奇経との関係

- ◇督脈…自経の穴（28）を持つ、「陽脈の海」「諸陽の統督」、手足太陽経との関連性が特に強い
- ◇任脈…自経の穴（24）を持つ、「陰脈の海」「一身の陰を統任」、
- ◇衝脈…12穴あるも内11穴は腎経・1穴は任脈の穴、「12経の海」「経絡の海」「血の海」。29難に「衝之為病・逆氣而裏急」とある。
- ◇帶脈…3穴は全て胆経、腰部を一周、29難に「任之為病・其内苦結・男子為七疝・女子為瘕聚」とある
- ◇蹻脈…陰蹻・陽蹻がある。  
陰蹻は腎の別脈・3穴の2穴は腎脈、1穴は足太陽の穴、  
陽蹻は足太陽の別脈・11穴・足太陽4足陽明3手陽明2手太陽1足少陽1などの穴、  
楊上善「人行健疾・此脈所能・故因名也」、  
楊玄操「蹻・捷疾也・言此脈是人行走之機要・動足之所由・故曰蹻脈焉」とあり、  
陰蹻脈の流注の記述の注（『靈樞』脈度第17）で楊上善は「入陰者・陰蹻脈入陰器」と言う。  
『難経』29難に「陰蹻為病・陽緩而陰急・陽蹻為病・陰緩而陽急」と述べる。
- ◇維脈…陰維・陽維がある。陰は陰脈を・陽は陽脈を維絡する。  
陰維は8穴・足太陰4・足少陰1・足厥陰1・任脈2の配分であり、  
陽維は15穴・足少陽10・督脈2・手太陽1・手少陽1・足太陽1の穴の配分。  
『難経』29難に「陰陽不能自相維・則悵然失志・溶溶不能自収持・陽維為病苦寒熱・陰維為病苦心痛」と述べている。

## 7. 奇経の主治穴ほか

郄穴	┌──任脈（絡～会陰<鳩尾>）……………（絡～長強）	督脈──┐
陰	├──衝脈（          ）……………（          ）	帶脈  └──陽
	├──陰蹻（郄～交信）……………（郄～跗陽）	陽蹻  └──
絡穴	┌──陰維（郄～築賓）……………（郄～陽光）	陽維──┐

## 8. 八脈交会穴☆

会合部位

健：内関（経一手厥陰～陰維脈）…公孫（経一手少陰～衝脈）	胃・心・胸
患：外関（経一手少陽～陽維脈）…臨泣（経一手少陽～帶脈）	外眦・頬・頸・耳後・肩
健：後谿（経一手太陽～督脈）…申脈（経一手太陽～陽蹻脈・絡）	内眦・項・耳・肩甲
患：列缺（経一手太陰～任脈）…照海（経一手少陰～陰蹻脈・絡）	胸・肺・瘕・咽喉

## 9. 郄と絡

	郄	絡		絡	郄	
手太陰肺經	孔最	列缺	～	偏歷	温溜	手陽明大腸經
足太陰脾經	地機	公孫	～	豐隆	梁丘	足陽明胃經
手少陰心經	陰郄	通里	～	支正	養老	手太陽小腸經
足少陰腎經	水泉	大鍾	～	飛陽	金門	足太陽膀胱經
手厥陰心包經	郄門	内関	～	外関	会宗	手少陽三焦經
足厥陰肝經	中都	蠡溝	～	光明	外丘	足少陽胆經

	絡	郄
任脈	会陰 (鳩尾)	
督脈	長強	
脾大絡	大包	
陽維脈		陽交
陰維脈		築賓
陽蹻脈		跗陽
陰蹻脈		交信

## 10. 下合穴

	下合穴
手太陽小腸	下巨虚
足太陽膀胱	委中
手陽明大腸	上巨虚
足陽明胃	三里
手少陽三焦	委陽
足少陽胆	陽陵泉

## 11. 六経根結（『靈枢』根結第5）

経別	根	結
太陽	至陰	命門（目）
陽明	厲兌	頰大（鉗耳）
少陽	竅陰	窓龍（耳中）
太陰	隱白	太倉（胃）
少陰	湧泉	廉泉
厥陰	大敦	玉英・臚中

## 12. 六陽経、根・溜・注・入（『靈枢』根結第5）

	根	溜	注	入	
				上	下
足太陽	至陰	京骨	崑崙	天柱	飛陽
足少陽	竅陰	丘墟	陽輔	天容	光明
足陽明	厲兌	衝陽	三里（下陵）	人迎	豐隆
手太陽	少沢	陽谷	小海	天窓	支正
手少陽	関衝	陽池	支溝	天牖	外関
手陽明	商陽	合谷	陽谿	扶突	偏歴

## 13. 四海・部位と穴（『靈枢』海論第33・動輸第62）

腦為髓海	頭	百会・風府	頭氣街
臚中為氣海	胸	膻門・大椎・人迎	胸氣街
胃為水穀海	上腹	氣衝・三里	腹氣街
衝脈為血海	下腹	大杼・上・下巨虚	腹氣街

## 14. 皮部

別図参照

経名	太陽	陽明	少陽	太陰	少陰	厥陰
皮部名	関枢	害蜚	枢持	関蟄	枢儒	害肩

## 15. 経別 別図参照



## 16. 開・闔・枢について（『素問』陰陽離合論第6、『靈枢』根結第5）

陽		陰
太陽	開	太陰
陽明	闔	厥陰
少陽	枢	少陰

★この開闔枢の理論は歴代の医家の重視したもので、六経弁証はこの理論と結合する事によって、六経弁証の基本的な意義が明らかにされるものとして把握した。汪機「読素問鈔」、方有執「傷寒論条弁」、柯韵伯「傷寒論翼」、及び羅美の序、など他。「陽」の開闔枢と「陰」の開闔枢について、病証論的な記述がある。次にそれを見よう。

注)『素問』陰陽離合論第6では「開闔枢」については単に「三陽之離合也」「三陰之離合也」と述べるに過ぎないが、註文には「新校正云按九墟～」と記したうえ「開闔枢」の意味に註している。『靈枢』根結第5の文とは、やや異なっているので、両者を並列して参考に供する。

素註・「開折則肉節潰緩而暴病起矣・故候暴病者取之太陽」

根結・「開折則肉節流而暴病起矣・故暴病者取之太陽」

素註・「闔折則氣無所止息而悸病起・故悸病者皆取之陽明」

根結・「闔折則氣無所止息而痿疾起矣・故痿疾者取之陽明」

素註・「枢折則骨搖而不能安於地・故骨搖者取之少陽・甲乙經同」

根結・「枢折則骨搖而不安於地・故骨搖者取之少陽・視有余不足・骨搖者節緩而不収也……当窮其本也」

素註・「開折則倉廩無所輸・隔洞者取之太陰」

根結・「開折則倉廩無所輸膈洞・膈洞者取之太陰・視有余不足・故開折者氣不足而生病也」

素註・「闔折則氣施而善悲・悲者取之厥陰」

根結・「闔折則氣絶而喜悲・悲者取之厥陰・視有余不足」

素註・「枢折則脈有所結而不通・不通者取之少陰・甲乙經同」

根結・「枢折則脈有所結而不通・不通者取之少陰・視有余不足・有結者皆取之不足」

## 17. 剛柔夫妻の関係

a) 表裏の関係にある陽経と陰経の間には相互に拮抗しあって調整し合う関係にある。

b) 陽経と陰経との五行穴（五腧穴）の相互関係も同様である。

陰井＝木・陽井＝金・陰榮＝火・陽榮＝水・陰俞＝土・陽俞＝木・陰経＝金・陽経＝火、陰合＝水・陽合＝土、となっている様に。

c) これらの他に「臟腑経絡剛柔夫妻関係表」の様な関係がある。

臟腑経絡剛柔夫妻関係表

甲己合化土	陽木（甲）胆＝少陽	陰土（己）脾＝太陰	甲己者土運統之
乙庚合化金	陰木（乙）肝＝厥陰	陽金（庚）大腸＝陽明	乙庚者金運統之
丙辛合化水	陽火（丙）小腸＝太陽	陰金（辛）肺＝太陰	丙辛者水運統之
丁壬合化木	陰火（丁）心包＝厥陰	陽水（壬）膀胱＝太陽	丁壬者木運統之
戊癸合化火	陽土（戊）胃＝陽明	陰水（癸）腎＝少陰	戊癸者火運統之

## 18. その他

## ☆子午の関係

今日「子午の鍼法」として紹介されているものには、次の四種類がある。

- a. 納子法
- b. 納甲法
- c. 靈龜八法
- d. 飛騰八法

これらの他「扁鵲神書」（華佗神応経の中に記載）の方法がある。「華佗の法」とも言われるもの。また、以上の何れにも該当しないが、子午の表裏の関係を利用する方法が行なわれているので、これを紹介し、他は別の機会に学ぶこととする。

子午運用表

1 2 支	旺気時	病経	対側指示経	絡穴
子	2 3 ~ 1	胆 経	心 経	通里
丑	1 ~ 3	肝 経	小腸経	支正
寅	3 ~ 5	肺 経	膀胱経	飛陽
卯	5 ~ 7	大腸経	腎 経	大鐘
辰	7 ~ 9	胃 経	心包経	内関
巳	9 ~ 1 1	脾 経	三焦経	外関
午	1 1 ~ 1 3	心 経	胆 経	光明
未	1 3 ~ 1 5	小腸経	肝 経	蠡溝
申	1 5 ~ 1 7	膀胱経	肺 経	列缺
酉	1 7 ~ 1 9	腎 経	大腸経	偏歴
戌	1 9 ~ 2 1	心包経	胃 経	豊隆
亥	2 1 ~ 2 3	三焦経	脾 経	公孫

## 注

1. 病証が特定経の走行経路や支配領野にあること
2. 治療経は健側の対側指示経の絡穴を主とするが、原穴・絡穴その他の要穴に圧痛反応が出ることがある
3. 経絡の旺気時が最適時であるがあまり拘わらなくとも良い
4. 病証がぼやけていたり圧痛が認められない場合は無効
5. 急性激痛・自発痛・けいれん・運動障害などに適応し、麻痺性疾患には不適
6. 刺入は浅く1～3分程度の留鍼が適当

## 19. 経の気血の多寡

『素問』の諸篇や『靈樞』の諸篇・対校資料として重要な『甲乙経』にある説は完全には一致していないので、今日の通説を採る事として置く（『鍼灸大成』の説）。

手太陰肺経	多気少血	手陽明大腸経	多気多血
足陽明胃経	多気多血	足太陰脾経	多気少血
手少陰心経	多気少血	手太陽小腸経	多血少気
足太陽膀胱経	多血少気	足少陰腎経	多気少血
手厥陰心包経	多血少気	手少陽三焦経	多気少血
足少陽胆経	多気少血	足厥陰肝経	多血少気

## 20. 標準的な刺入深度と留鍼時間

手太陰肺経	2分	1呼
手陽明大腸経	2分	1呼
足陽明胃経	6分	10呼
足太陰脾経	3分	4呼
手少陰心経	2分	1呼
手太陽小腸経	2分	1呼
足太陽膀胱経	5分	7呼
足少陰腎経	2分	3呼
手厥陰心包経	2分	1呼
手少陽三焦経	2分	1呼
足少陽胆経	4分	5呼
足厥陰関係	1分	2呼

『靈樞』経水第12

## ☆血に関連する臟腑経絡について

血の生成は先天の「原気」が「三焦」によって具体的に実現される、その作用力に駆動されて「胃気」が機能する。この胃に入った水穀は「腐熟」されて「水穀の精」に変化した物が吸収される、これが「水穀」の「化生」したものである。これが上に輸られて「脈」＝「血脈」に行って変化して「血」となる。この化生と吸収と輸布に際して「脾」が主動的に機能する、「血脈」は「心」の主管する所である、心を駆動させるものは「先天の元氣」と共に作用する「肺」の「肅降」と「輸布・敷布」の性質である、「津液」と「血」とは相互に転換して極めて密接である、『靈枢』経脈第10では、「大腸経」は津を、「小腸経」は液を主り、「胃経」は血を主ると記述する。また「肝は血を臓す」「脾は血を統べる」「心は血を化生する」と「内経」は記述する。

以上を整理すると「脾」「心」「肝」の三臓と「胃」「大腸」「小腸」の三経、そして血の順行の上で「肺」「三焦」が関連する臟腑経絡と言う事になる。また『靈枢』海論第33に指摘されている「衝脈」も重要であるし、『靈枢』海論第33に記述されている治療穴は重要である。出血性疾患は多くは「温病」の「榮分」と「血分」の病であるが、「瘀血」に起因するもの、「血虚」が甚だしい為に「統血」力が失われて起こるもの、等がある。従って「証」を良く診て治療する事が必要である。脾と心包のセット・肝と心包のセットには、増血・理血の作用が認められている。

## ☆津液（水）に関連する臟腑経絡について

水分が摂取吸収されて生理的に正常に機能している状態にあるものを「津液」と呼んでいる。不正常的な状態のものは「飲」「痰飲」である。「飲」が「皮」に溢れば「腫」となり、「腹中」の「膜間」に溢れば「脹」となり、「胃」中に滞留すれば「飲」、上焦に滞うれば「痰飲」となる。水分を津液として化生する生理的機構と機能と、この問題が此処での論点である。「津」を主る経として「大腸」・「液」を主る「小腸」経・「三焦」の水道を調理する「三焦」・「水」の臓で二便を主る「腎」・「水」腑である「膀胱」・「水」の「上源」とされる「肺」等が「水」に関連する臟腑経絡である。異常に渴いて飲水を欲するものは「裏熱」による事が多いので、これを処置しなければならない。異常な発汗は「陽明」の熱や表虚である事が多いので、これには「証」を診て対処しなければならない。「浮腫」「腫脹」にはそれぞれの病理を診て「証」に従って対処する事が大切である。

『素問』水熱穴論第61に記述されている「水穴」と「三焦」の下合穴「委陽」や「浮郤」は重要である。

## ☆衛気榮血の概念区分について

古くは「衛気」と「榮血」・或は「気」と「血」の様に二分されて解釈される記述があった。『温病論』の成立によって「衛」「気」「榮」「血」として概念区分が確立したものである。似通った問題としては「三陰三陽」論がある、『内経』の「熱論」他に記述があるが、辨証の問題として確立したのは『傷寒論』であり、その後の外感病の臨床と研究によって完成されるに至ったものである。限定された意味では『傷寒論』の「三陰三陽」は病位を体表に投影させて把えたもの、『温病論』の「衛気榮血」は病位を深さとして、かつ体の生理的機能成分との関連において把えたものと言う事ができよう。

## 1. 「衛」の分と臟腑経絡

衛分とは衛気が機能している部位のことであり、皮毛腠理の分である。五臓では肺の主る分である。衛気の生理的な機能は、肌表に広がって、それを養い温煦し、また「腠理」「玄府」の開闔を主っている。そして「外邪」が侵襲するのを防御したり、「外邪」を駆逐したり等々である（つまり、体表部で気温の変動に対する適応・体温調節・発汗調整・皮膚呼吸・体表部抵抗性など）。李東垣は「穀気ハ陽気ナリ」と「水穀ノ精」特に「穀ノ精」が体を温煦しているものである事を指摘している。これは胃脾の機能に大きく依存する。しかし、「穀気」が「陽気」として作用できる為には、「元氣ノ別使」（三焦・元氣＝原氣＝先天ノ気で、腎が之れを蔵する。この「元氣の別使」が三焦である）によって、「上輸」されて「脈中」に行くものが「榮血」、「脈外」に機能するものが「衛気」となる。これは「心ハ脈ヲ主サドル」事と「肺」な敷布し肅降させる作用によって、具体的に機能できる力に転化し実現する、と言う仕組みにまたなければならない。体表を「温煦」し腠理を「濡」おし「肥」やすと言う衛気の機能は、一方では「陰分」の「精」を「陽の分」に汲み上げて「陽」に転化する機構が働かなくては、達成できない。「陽」は「陰」に根ざし、「陰」より転生されるものであるから。この「汲み上げ」を担っているのが、胆と三焦の少陽を「枢」とする諸陽である。皮毛腠理を「濡肥」「温煦」する姿は「陰水が温陽に温められた慈雨や靄霧の如し」と言われる。「水が陽火によって蒸発された」ものにも例えられる。そこで「水の腑」が生理的に順当に機能しなければならない、つまり「水火」の交流の相互作用が順当に行なわれなければならないのである。「水腑」は膀胱「水臟」は腎、「火」は心・心包・小腸・三焦である。「諸陽の統督」とされる「督脈」の八宗治穴である「後谿」は小腸経の兪木穴である。体表を最も広く分布している経脈は太陽膀胱経である。衛分の病が太陽経の病証を主とし、また肺の病証を主としているのは、以上の生理的機構によるのである。また「風」「風寒」「風湿」「風熱」などの「風」を主軸とする病が多いものである。表寒虚証には足三里を欠かせないのも、陽は穀気に他ならない点から肯ずけることであろう。詳しく病症と診て証に従って治療の事。

## 2. 「氣」の分と臟腑経絡

温病論の「気分」証の記述を見ると、主として「陽明」の「熱症」として扱えられる。つまり「陽」分の「裏」証であって、未だ「榮」分に入らない状況である。従って「陽明」の熱を瀉し「表陽の裏」を清利させる治法が主となる。津液を保持し熱をさまし陰がやられない様に配慮するのであり、病位的には肺・胃・脾・腸・胆などの何れか或は幾つかに病位がある。衛分の場合は肌表・頭部・気道が病位であるのと異なる。

## 3. 「榮」の分と臟腑経絡

熱が榮陰を灼り傷めて津液が損耗している故に榮心の熱を清し開竅する。

## 4. 「血」の分と臟腑経絡

病位は心肝腎で、熱が血に籠って心神を擾乱されている。（別論する）